

アラビア語口頭発表トレーニング報告書

東南アジア地域研究専攻 連環地域論講座

平野淳一

2010年6月から7月にかけての2ヶ月間、3回にわたって、アラビア語口頭発表トレーニングが総合研究2号館大会議室(AA447)及び第一講義室にて行われた。本口頭発表トレーニングは、ITPプログラムの一環として、アウトプット言語としてのアラビア語力を磨くことを目的に、院生が自身の研究プロポーザルをアラビア語で発表することを趣旨とするものである。その際に、発表者は自身の研究テーマ・内容をA4一枚程度のアラビア語でまとめ、それを口頭で発表し、講師のサナーア・マフルーフ先生にコメントを頂くという体裁をとった。講師のサナーア先生は、カイロ・アメリカン大学の教授で、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に客員教授として招聘されており、スーフィー思想・クルアーン注釈の意味論的分析の専門家である。発表者の人数は1・2年生を中心に計7名に上り、それぞれ5分ほどの発表及び15分程度の質疑応答を行った。基本的に、これら全行程は、全てアラビア語でとり行われた。

第一回目は、6月11日に開かれ、アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻連環地域論講座の安田慎氏が報告を行った。シリアへの留学を直前に控えたその安田氏による報告「シリアにおけるシーア派宗教観光」では、主にシリアにおける宗教観光、とりわけシーア派宗教観光についての概要を述べるものであり、シリアにおけるシーア派コミュニティの研究において「宗教観光」という切り口から迫ることの意義が述べられた。これに対し、サナーア先生を含むフロアーからは、「宗教観光」という用語の妥当性について、また、シリアにおける研究対象地の概略について質問が寄せられた。

約1ヵ月後の7月12日に行われた第二回目の発表トレーニングでは、同専攻講座の平松亜衣子、グローバル地域研究専攻イスラーム世界論講座の遠藤春香、同専攻講座の二ツ山達郎の3氏による報告が行われた。「クウェートにおけるイスラーム主義運動と議会政治」と題された平松氏の報告では、クウェート女性による議会政治への参画とそれに対するイスラーム主義組織の見解の分析を行った博士予備論文を踏まえた上で、博士論文では、イスラーム法に適った投資をめぐる議会政治の内実について考察を行う見込みが提示された。続く遠藤氏による報告「イブン・アラビーの完全人間論と聖者の封印論」では、1年生である氏が今後の研究の対象として設定しているイブン・アラビーと彼の構築した完全人間論について、その概要を簡潔に説明するものであった。一方、同じく2年生の二ツ山氏による「私の研究テーマ」と題された報告では、氏のリサーチ・エリアであるチュニジア南部において、日常生活と神秘的力への信仰とがどのような関係を取り結んでいるのか、そのトピックに関する青写真が示された。以上の3氏の発表それぞれに関して、フロアーからは、博士予備論文と博士論文のつながりについてや、研究遂行にあたって依拠する方法論

について、またリサーチ・エリアの詳細に関する質問が寄せられていた。またこの時、講師のサナーア先生からは、アメリカ流の研究プロポーザル作成の作法として、①研究者自身がなぜその特定の研究テーマを選択したのか、②自身の研究が、学界や社会にどのような影響を与えうるのか、について述べることが求められるということが指摘された。これは、研究者自身の研究遂行上の動機付けに関する主観的側面と、研究成果の社会への還元と貢献という客観的側面を明確にしておくことの大切さをご教示下さったものといえる。

最終回である第三回目は、7月28日に開催され、東南アジア地域研究専攻連環地域論講座の須永恵美子、同専攻講座の柘堀木綿子、グローバル地域研究専攻イスラーム世界論講座の石田由梨の3氏による報告が行われた。須永氏による「パキスタンにおけるイスラームと社会——ウルドゥー文学の観点から——」と題された発表では、ウルドゥー語がネーションの言葉であると同時にイスラームの言葉でもあるというパキスタン社会の特質を踏まえた上で、ウルドゥー文学に着目してパキスタンにおけるイスラームと社会の関係を考察するという展望を述べるものであった。2人目の柘堀氏による報告「人々が抱くアミール・アブドゥルカーディル像の変遷」では、アミール・アブドゥルカーディルの生涯の簡単な解説ののち、予備論文で彼の行動と思想の関係を議論したことを前提に、博士論文では今日に至るまでの彼のイメージの変遷を、彼が生きた当代とその死後の二つの段階に分けて考察するという展望を明らかにした。最後に石田氏による報告「ラターイフ論における諸段階」では、予備論文及び博士論文において、中世のイブン・スィナーから近代のシャー・ワリーウッラーに至るまでの、スーフイズムにおける靈魂論と、ラターイフ論の諸段階説を中心とする哲学との間に存在する相違について明らかにしていくという見込みが述べられた。3氏による以上の報告のそれぞれに対して、フロアーからは、パキスタン社会におけるウルドゥー語とアラビア語との関係性、さらにはペルシア語との関係性について、フランスにおけるアブドゥルカーディル研究の現状とその評価について、イスラーム哲学をめぐる先行研究の整理の仕方についてなど、質問が寄せられた。

本口頭発表トレーニングの第二回目でサナーア先生がご指摘された「社会への還元と貢献」を思うとき、地域研究者にとっての「社会」には、「その研究者の所属する社会」と、「その研究者が研究対象とする地域の社会」の2つの意味が含有されているように思われる。中東地域研究者であれば、それは日本であると同時に、イスラームの規範的言語であるアラビア語が圧倒的な優位性を占める社会であるだろう。後者の社会へ知的に貢献することが求められるならば、当該地域の主要言語であるアラビア語で研究成果を発信していくことの意義は極めて大きいはずである。この意味で、若い頃からそのアラビア語による発信トレーニングを積んでおくことの重要性は、いくら強調してもしすぎることはない。本口頭発表トレーニングは、そのための大きな橋頭保となったことは間違いない。